

所有を表す have got についての語用論的分析

日 高 俊 夫*

今 西 真 弓**

要 旨

一般にイギリス英語の口語表現でhaveと同様に所有の意味を表すとされるhave gotを共時的に分析する。具体的には、先行研究(登田1994; Tamura 2005等)において、「発話時である現在における(一時的)所有」という概念がhave gotの中核的意味とされるのに対して、本論では発話行為的側面に焦点を当て、have gotは富岡(2010)における「主張行為」を担うことを主張する。このことにより、先行研究におけるhave gotの分布に関する記述を統一的に説明できることを示す。また、have gotが主に用いられるとされる現在時制であっても「主張行為」にあたらない場合は容認性が低い一方で、先行研究において容認性が低いとされる「過去時制での使用」「不可分所有」「習慣的狀態」「総称文」においても「主張行為」にあたる場合は容認性が向上する事実や、データに対する先行研究の容認性判断における齟齬が原理的に説明されうることを併せて示す。

キーワード: イギリス英語、口語表現、語用論、発話行為、主張行為

* ひだかとしお、九州国際大学現代ビジネス学部、t-hidaka@cb.kiu.ac.jp

** いまにしまゆみ、九州国際大学科目等履修生、mayumi.crazy5.smap@gmail.com

1 分析対象および問題点の所在

小論では、イギリス英語における口語表現で、haveと同様に所有を表すとされることの多いhave got について、その意味・機能の詳細を共時的に分析する¹。

Jespersen (1931) によれば、have gotは現在完了をその起源としているが、(1)に示されるように、少なくとも現代英語においては完了の意味はほぼ消失しており、haveと同様の意味を表すとされる。

(1) In colloquial English *I have got (I've got)* **has to a great extent lost the meaning of an ordinary perfect and has become a real present with the same meaning as *I have*** ('have in my possession') ; ...

(Jespersen 1931 : 47, 太字は筆者)

(2)に示すように、Swan (2016)にも同様の記述がある。

(2) In conversation and informal writing, we often use the double form *have got*.

I've got a new boyfriend. (More natural in speech than *I have a new boyfriend.*)

Has your sister got a car? I haven't got your keys.

Note that ***have got* means exactly the same as *have* in this case – it is a present tense of *have*, not the present perfect of *get*.** (Swan 2016 : 24, 太字は筆者)

また、歴史的な発達について、Jespersen (1931 : 47-48) では(3)のように記されており、その記述を参考にしたと思われる荒木・宇賀治 (1984 : 435-436) では(4)のように述べられている。

(3) The earliest examples of this use of have got seem to date from the sixteenth century; it probably began with objects denoting things (*I have got a knife*, etc.), but is now used also with immaterial objects (*I have got no time*) and before the infinitive with *to*. The reason for this development

is obviously that on account of its frequent use as an auxiliary, *have* was not felt to be strong enough to carry the meaning of 'possess' and therefore had to be reinforced.

- (4) *get* の完了形として初期中英語に現れ、'have acquired' を意味したが、次第に完了の意味が弱まり、本動詞 *have* の同意表現 (= possess) として16世紀後半から用いられるようになった。*have* が助動詞として頻用されるにつれて、本来の意味が薄れたと感じられ、補強表現に *have got* が転用されたものであろう。

歴史的な発達の詳しい過程については本論の及ぶところではなく、稿を改めて論じる必要があるが、*have got* が、Jespersen が言うように *have* の法助動詞化に伴って薄れた所有の意味を補強するための表現であるとするれば、one form, one meaning (Bollinger 1977) という観点から、同じ意味を持つ *have* もしくは *have got* のいずれか一方の用法が廃れると考えられるが、現実には異なり、両者が共存している。実際、Jespersen (1931) 自身をはじめとして、Visser (1973), Quirk et al. (1985), Swan (2016) 等の先行研究においても *have* と *have got* の分布の違いが指摘されており、それらは次のようにまとめられる(同様の説明が中尾・児馬 (1990)、Oxford Advanced Learner's Dictionary、『新英和中辞典』、『ジーニアス英和辞典』等にも見られる)。

- (5) a. 過去時制において用いることは一般的ではない。

(??I had got some problems.)

- b. 繰り返しや習慣的状态を述べる場合は一般的でない。

(??I often have got headaches.)

- c. *will*, *shall* の後の不定詞としては用いない。

(??You never will have got any sense.)

- d. 命令文には用いない。

(??Don't have got anything to do with him.)

- e. 表層上目的語を欠く部分には用いられない。

(??I've got nothing yet, but I'll let you know when I have got.)

f. 特に否定文・疑問文で用いられることが多い。

以上のことから、have gotは、概ねhaveと同じような意味を表しつつも、基本的にはhave gotの分布の方がhaveのそれよりも狭いと言えそうである。

以上のことを踏まえて、本稿では次の疑問を解決することを目標とする。

(6) a. have と have got はどのように異なるのか？

b. (5) に示される、have と異なる have got の分布はどこから導出するのか？

本論では、(6a) の問題を語用論的観点から捉えることによって、先行研究では(5)のような記述のレベルに留まっていた分布の理由(6b)を統一的に説明することを目標とする。具体的解決の前に、次節では先行研究を概観し、問題点をさらに具体化していく。

2 先行研究および本論の主張

本節では、先行研究においてhave gotの表す意味としてしばしば主張される「強調性」「一時的所有」「現在における所有」等について批判的に考察・検討し、本論の主張を述べる。

2.1 「強調的」「(現在における)一時的所有」

まず、一般の辞書におけるhave gotの記述を概観する。

(7) a. 話し言葉では have got は have の、また have got to は have to の代用になる。

b. 一般に have got (to) は have (to) よりも強調的。

(新英和中辞典)

(8) a. He has blue eyes.

b. Look at him; he has got a black eye.

have が「長い間ずっと持っている」ということを表わすのに対して、have got は「一時的にその時持っている」ということを表わすことが多い。

(ライトハウス英和辞典)

まず、問題となるのは (7b) の「強調的」ということであるが、これが具体的にどのようなことかはっきりしない。Curme (1931) には (9) の記述があり、「最近起こったこととしての所有や必要性を強調する」と述べている一方、口語等では have と同様に用いるとの見解を示している。

- (9) *Have got*, however, is not an exact equivalent of *have*; it has more grip in it, **emphasizing the idea of the possession or the necessity as the result of some recent occurrence**: 'He has a blind eye,' but 'Look at John; he has got a black eye.' **But in colloquial and popular speech the development has gone farther: *has got* often has the meaning of simple *have***: 'What have you got (= have you) in your hand?' (Curme 1931 : 360, 太字は筆者)

本論では、この「強調的」という意味の中身と、それが得られる理由を明らかにしていく。

次に「一時的所有」について、先行研究の主張を概観する。Fodor & Smith (1987) は、(10) にある John's got green eyes. のような例を用いて、(8a) あるいは (9) に反して、必ずしも have got が「一時的所有」の意味を表さないということを示唆している。

- (10) [*H*]ave got is not perfective in meaning. If John has got something, then he possesses it now; **there is no implication that he recently acquired it, or even that he acquired it at all** (cf. John's got green eyes).

(Fodor & Smith 1978 : 45, 太字は筆者)

また、Quirk et al. (1985) にも、(11) に示すように、John has got courage. のような「一時的所有」とは言えないと思われる例がある。

- (11) There is another informal *HAVE got* construction (cf 3.45), which although perfective in forms is nonperfective in meaning, and is

frequently preferred (esp in BrE) as an alternative to stative HAVE:

John has courage. = *John has got courage.*

It is particularly common in negative and interrogative clauses.

(Quirk et al. 1985 : 131)

一方、登田（1994）は Curme（1931）の立場を踏襲し、「青い目をしている」のような意味を表す場合は has got よりも has を用いることが一般的だという立場をとるが、Tamura（2005）は同様の意味を表す（12）の文を容認可能としている。

(12) Mary has got brown eyes. (Tamura 2005)

さらに、登田（1994）は（13）のような、いわゆる定義文を容認可能としたが、筆者のイギリス人インフォーマントは同じ文を容認しがたいと判断した。

(13) A rectangle hasn't got equal sides. (登田 1994)

以上のことから、「一時的所有」という意味的制約については、研究者によって認める立場とそうでない立場があると言える。本論では、どちらが正しいかというよりも、なぜ研究者によってこのような容認性判断の違いが出てくるかということについて、その理由を明らかにする。結論としては、「一時的所有」の意味は have got の意味のコアを成す訳ではなく、同表現の持つ語用論的な機能によって派生的に得られる、いわば表面的な意味であることを主張することにより、先行研究における容認性判断の違いを説明する。

2.2 「現在における所有」

(5a) にあるように、have got の過去形は一般的でないとされている。登田（1994）は、have got は基本的に「現在における所有」を表すとし²、過去形で用いられている（14）の文を容認不可能とする一方、同じ過去時制の文（15）は容認されるとし、その理由を（16）のように説明している。

(14) a. *Had you got a car when you were a student?

b. She had (*got) blue eyes.

- (15) When I saw Yoko for the first time, I was amazed. She'd got blue eyes.
- (16) (14a) の一時的所有の場合即ち過去のある時点での所有が現在どうであるか不明の場合は、had got は不可能であるが、(15) の譲渡不可能な永続的所有の場合には、現在時もその所有が持続している可能性があり、had got が容認されるのではないであろうか³。

(登田 1994, 番号は筆者)

また、登田 (1994) は、(17a) の文の容認性が低い理由を (17b) のように述べている。

- (17) a. ??/*Every year he's got a weeks' holiday.

- b. 習慣や繰り返される出来事は、「彼は現在1週間の休みをもらっている」という現在時の状況でなく、過去時と未来時の事態をも含む一般状況を表すため、have got では記述できないのではないだろうか。これに対して、総称的な文 (13) は現在時に於ける長方形の特性を記述しているので、have got は容認される。

しかしながら、(13) のような、登田自身が容認されると判断している定義文に関しては「現在時における長方形の特性を記述している」という説明は無理があると思われるし、Jespersen (1931 : 49) の次の記述とも相容れない。

- (18) The corresponding preterit *had got* = 'had' is not so frequent, though one hears familiarly "**I'd got no money**, so I couldn't pay him" / **Had you got a headache** yesterday, since you didn't come? etc.

(18) における「お金がない」「頭が痛い」ということが現在も続いているという解釈は通常なされないであろうから、(18) の例は「現在における所有」の制約の反例となる。

2.3 問題点の総括と本論の主張

先行研究の観察を踏まえると、本論で解決すべき疑問は次のように集約される。

- (19) a. (5) の have と have got の分布の違いの原因は何か？
- b. have got の (中核的) 意味として先行研究で想定されている「一時的所有」「現在における所有」等の説明は妥当か？
- c. 過去形は一般的でないと言えながらも容認可能な文もあるが、過去形において容認可能な例と容認性が低い例に何か違いはあるのか？
- d. なぜ研究者によって同様の文の容認性判断が異なるのか？

以上の問題に対して、本論では、have got は、概ね富岡 (2010) における「主張行為 (話者が真であると思う命題を新情報として提供し、会話の進歩に貢献する行為)」という発話行為を担う⁴ことを主張する。そしてそのことによって、(19) の問題点をそれぞれ次のように解決できることを示す。

- (20) a. (19a について) (5) の分布の違いは、本論の主張から統一的・一般原理的に導出する。
- b. (19b について) 「一時的所有」「現在における所有」等の意味は、have got の語用論的機能である「主張行為」と符合しやすい一方、不可分所有や属性を表す文でも「主張行為」として認定可能な場合は容認性が向上する。
- c. (19c について) 「主張行為」は一般的に過去時制と相性が良くないが、過去時制であっても主張行為として認定可能な場合は容認性が向上する。
- d. (19d について) 先行研究では have got の語用論的機能が十分考慮されていないため、同じような文でもコンテキストによって容認性が異なることが捉えられておらず、その結果、研究者によって文の容認性判断が異なるという結果になる。

以下では、現在時制、過去時制、および法助動詞を伴う have got の語用論的振る舞いを観察・分析することによって (20) の妥当性を示していく。

3 現在形

3.1 現在時における所有？

登田 (1994) は、have got は現在時における所有の概念を強く示すとし、次の文を適切な文として提示している。

(21) I haven't got any whisky.

しかしながら、筆者のインフォーマントによれば、(21) が容認されやすいのは (22) のような文脈においてであり、同じ文でも単なる事実描写を表す場合には容認性が低下し、have got よりも have を用いた方が適切である。

(22) Oh my god! I haven't got any whisky.

(自宅のサイドボードの中を見ながら)

ここから考えられるのは、登田における (21) の (インフォーマントの) 容認性判断は (22) のような文脈や場面を前提としている可能性が高いということである。

「現在における (一時的) 所有」を表していても、それが単なる事実描写の場合には容認性が低下するという事は、「現在における (一時的) 所有」が have got の本質的な意味ではないことを示唆していると考えられる。

また、筆者のインフォーマントによれば、次の文では have と have got のニュアンスが異なる。

(23) a. I have a few bottles of whisky.

b. I have got a few bottles of whisky.

(23a) はそこで会話が終わっても不自然ではないのに対して、(23b) はそこで会話が終わるとやや不自然で、続けて「だから一緒に飲もう」等の提案がなされたり、話者がウィスキーのボトルを取りに行く等の行為が続くことが自然だという。

以上のことから、have got は、話し手が聞き手に対して新たな情報を提供し、さらなる対話や行為を誘発するという機能を持つことが示唆される。つまり、

have got は、それ自体が談話遂行的な機能を持つと言えそうである。

3.2 習慣的状态

登田 (1994) は have got の本質的意味を「現在時での所有」と位置づけ、先述したように、それが保証されない習慣的な状態を表す (17) ((24) として再掲) では、通常 have got ではなく have が用いられるとしている。

(24) (=17a) */??Every year he's got a week's holiday. (登田1994)

しかしながら、習慣的な状態を表す同様な文も、(25) のような文脈では問題なく容認される。

(25) Amazing! Every year he's got a month's holiday!

(25) が「現在時での所有」を表さないにもかかわらず問題なく容認されることから、「現在時での所有」の概念は have got の本質的な意味ではないことが示唆される。このような習慣的な状態の容認性も、have got が「話し手が聞き手に対して新たな情報を提供し、さらなる対話や行為を誘発する」という語用論的機能から導出すると考えることによって、より自然な説明が可能になると思われる。

3.3 不可分所有、属性、総称的な文

2.1節で述べたように、いわゆる不可分所有や属性を表す文における have got については研究者によって容認性が異なる。登田 (1994) が「青い目をしている」のような意味には通常 have got を用いないとしているのに対して、Quirk et al. (1985) や Tamura (2005)、Fodor & Smith (1978) は類似の文を容認可能としている（一方、登田 (1994) では、A rectangle hasn't got equal sides. は容認可能な文とされている）。整理すると (26) のようになる。

(26) a. John has got courage. (Quirk et al. 1985)

John's got green eyes. (Fodor & Smith 1978)

Mary has got brown eyes. (Tamura 2005)

A rectangle hasn't got equal sides. (登田 1994)

b. He has a blind eye. (Curme (1931) ; 登田 (1994) も同様)

?*A rectangle hasn't got equal sides. (筆者のインフォーマント)

Tamura (2005) は (26) の中に示す文の他に、次の例も容認可能なものとして提示している。

(27) Look at that face! He hasn't got any teeth! (Tamura 2005)

筆者のインフォーマントは、次に示すように、(26) にある A rectangle hasn't got equal sides. と類似の文 (28a) は容認し難いと判断する一方、同じ文の容認性が、(28b) のような教授するような文脈では向上するとの判断を示した。

(28) a. *A square has got four equal sides.

b. Look at this shape. This is called a square. Remember, a square has got four equal sides.

問題となっている文は総称文の中の「定義文」とも呼ばれるものであるが、通常の総称文においても事情は同様である。

(29) a. *A hawk has got sharp talons.

b. Look at this bird. This is a hawk. Remember, a hawk has got sharp talons.

(30) a. *A crane has got a long neck.

b. An important distinctive feature of a crane is that it has got a long neck.

以上のデータから、不可分所有、属性を表す文や総称的な文においても have got は容認される場合があり、それは単なる事実描写というよりも話し手が聞き手に対してその文で表される命題を重要な新情報として提示する場合であるということがうかがわれる。

3.4 まとめ

これまでの観察から、have got は単なる事実描写文としては容認性が低い一方で、先行研究で容認し難いとされている例や研究者によって容認性判断が異

なるような例についても、話し手が聞き手に、それによって表される情報を会話の進歩に貢献する重要な新情報として伝えるような場合には容認される傾向があるということが言える。

本論の主張が正しいとすれば、have got が表す状態が明らかに旧情報である場合は容認性が落ちるという予測が立つが、以下でそれを検証する。

一般に、定名詞句に続く制限的關係詞節が表す内容は一般的に前提となり、不定名詞句に続く制限的關係節は断定される（福地1985、田中・村上1995）。

(31) a. The girl I met speaks Basque.

b. A friend of mine who is good at chess will be staying with me for a week. (福地1985：171)

これを have got を伴う關係詞節にあてはめてみよう。

(32) a. ?*Do you know that girl who has got green eyes?

b. Could you introduce to me a girl who has got green eyes?

(32a)の定名詞句に続く制限的關係詞節では、who has got green eyesが前提すなわち旧情報を表すが、この文の容認性は低い。一方、不定名詞句に同じ關係節が新情報として導入される(32b)は問題なく容認される。

以上のことから、(haveと異なる) have gotの本質は、「現在における所有」のようなセマンティックな意味にあるのではなく、話し手が聞き手に、それによって表される情報を会話の進歩に貢献する重要な新情報として伝えることであるというプラグマティックな機能にあるという本論の主張は支持されると考えられる。

4 過去形

(5a) や (14) といったデータや先行研究の主張からは、have gotの過去形 had gotは一般的でないといわれる。しかしながら一方で、(18)のJespersen (1931)の例など容認されるものもあるという事実もある。このことについて

も本論の主張から説明が可能であると思われる。つまり、過去時制についても、話し手が当該情報を重要な新情報として提示したり、また、それをを用いて次の対話に繋げる場合は容認性が向上するということである。これまで本論で挙げてきた過去形の例を再掲すると次のようになる。

(33) a. Had you got a headache yesterday, since you didn't come?

b. I'd got no money, so I couldn't pay him. (Jespersen 1931)

(34) a. *Had you got a car when you were a student?

b. She had (*got) blue eyes.

c. When I saw Yoko for the first time, I was amazed. She'd got blue eyes.

(登田1994)

(33a) では since 以下が前提すなわち旧情報を表しており、主節の疑問文は、聞き手が来なかったという周知の事実(旧情報)に対する新情報としての理由を尋ねている。(33b) も同様に so 以下は周知の事実として解釈可能で、その場、前節が新情報としての主張を表すことになるので容認される。ちなみに、(33b) は後節を新情報として解釈することも可能であるが、(35) が示すように、そのような解釈を強制する環境では容認性が落ちる。

(35) ??As you had already known, I'd got no money, so I couldn't pay him.

(34a, b) が単なる事実について述べているのに対し、(34c) は、had got を含む文の命題を、重要な新情報(話者が驚いた理由)として述べている。

筆者のインフォーマントは、過去形においても、単なる事実描写としての性格が強い(36a) は容認性が低い一方、(34c) に準じるような文脈を持つ(36b) では問題なく容認されると判断した。

(36) a. ??He had got an expensive car in his university days.

b. I was surprised. He had got such an expensive car in his university days!

以上のことから、過去形においても本論の主張は支持されるように思われる。本論の主張に基づけば、先行研究において have got の過去形が一般的でな

いとされている理由は、現在時制で表される命題が比較的重要な新情報として表されやすいのに対して、過去形で表される命題は事実描写であることが多いためであるということになる。

5 法助動詞を伴う例

本論(5c)では、have gotはwill, shallの後には用いられないという先行研究の知見を紹介したが、他の法助動詞に対するhave gotの振る舞いも確認しておきたい。

(37) a. #She must have got a boyfriend.

b. #She may have got a boyfriend.

c. #She might have got a boyfriend.

(37)の各文は、「最近彼氏ができた」のような完了の意味としては解釈可能だが、例えば(37a)であれば「彼女には彼氏がいるに違いない」のような単純な所有の意味には解釈できない（「#」は、目標とする意味（所有）としては解釈できないことを示す）。

先行研究では、「have gotはwill, shallの後には用いられない」とされているだけで、管見の限り、その理由は明確に示されていない。本論の主張に基づけば以下のような説明が可能であると思われる。

法助動詞を伴う文については、たとえ「～に違いない」というような意味のmustが用いられていたとしても、話者は命題の真偽については留保している。つまり、(37)のような文においては話者が「彼女に彼氏がいる」という命題について、それが真であることを前提として発話することができない。そのため、法助動詞を伴う文にはhave gotを用いることができないということになる。

ところで、本論の主張が依拠している富岡(2010)では「話者が真であると思う命題を新情報として提供し、会話の進歩に貢献する行為」を「主張行為」と呼んでいるが、(37)のような例を説明するには、次のような微修正が必要

かもしれない。

(38) 主張行為：話者が、真であることを前提として当該命題を新情報として提供し、会話の進歩に貢献する行為

「話者が真であると思う」では、例えば (37a) の意図する解釈においては、話者は「彼女に彼氏がいる」という命題に対して「そうに違いない」と「思っていることになるので富岡 (2010) の「話者が真であると思う」では幾分弱い主張となるだろう。(38) のように、have got は、それが用いられる命題が真であるということを前提とした上で話者がその命題を主張するために用いられると考えれば、法助動詞を含む文はそれに符合しないため、認められないということになる。

6 まとめと課題および展望

6.1 まとめ

本論では、(6) の問いに関して、先行研究の「一時的所有」や「現時点での所有」を表すという意味論的な説明を批判的に検討し、have got が富岡 (2010) の「主張行為」と同様の「話者が、真であることを前提として当該命題を新情報として提供し、会話の進歩に貢献する行為」という発話行為を担うことを主張した。そのことにより、「一時的所有」や「現時点での所有」を表す場合でも、単なる事実描写文としては容認性が低い一方で、先行研究において容認性が低い、あるいは一般的でないと言われる「不可分所有」や「習慣的状态」「総称文」「過去の文」においても、それを真の値を持つことを話者が前提とし、それを(重要な)新情報として提示するような文脈では容認性が向上することが説明できる。

また、本論の主張が正しいとすると、冒頭 (5) の問題点 (39) にも再掲) について次のように解答することができる。

(39) a. 過去時制において用いることは一般的ではない。

- ←過去時制の文は事実描写であることが多い。
- b. 繰り返しや習慣的狀態を述べる場合は一般的でない。
- ←繰り返しや習慣的狀態は事実描写として述べることが多い。
- c. will, shall の後の不定詞としては用いない。
- ←法助動詞を用いる文は、当該命題が真であることを前提とできない。
- d. 命令文には用いない。
- ←命令文は真偽値が決められない。
- e. 表層上目的語を欠く部分には用いられない。
- ←表層上目的語を欠く部分は（欠けた目的語は省略されていて）旧情報であることが多い。
- f. 特に否定文・疑問文で用いられることが多い。
- ←否定はそれに対応する肯定の内容がすでに議論されたかあるいはその肯定の内容を聞き手が信じている－よく知っている－と話し手が思っているような文脈で用いられる（Givón 1975）。つまり、否定の部分そのものが、焦点となるような重要な新情報となるので、否定文の発話は主張行為となりやすい。疑問文は、質問主が相手に新情報としての真の命題を答えとして要求する文である。

さらに、(7)、(9)で挙げた『新英和中辞典』やCurme (1931)の「強調的」という説明も、本論の主張からすれば、have gotの使われる節や文が担う情報は「話者が真であることを前提とした新情報」であり、話者はそれを以って「会話の進歩に貢献」しようとしているので、「強調」に値する情報であるというように、さらに精密な説明が可能になる。

本論では、have gotの本質は発話行為における機能にあると主張してきたわけであるが、そもそもhave gotは口語表現とされていることから、発話行為的機能を持つことは自然であると考えられる。しかしながら、先行研究においてお互いに類似した文の容認性が研究者によって異なっているという事実は、これまで発話行為的観点からの考察が十分になされてこなかったというこ

とを示しているのではないだろうか。

6.2 課題・展望

本論は、have gotの本質は発話行為的機能にあるということを論証してきた。共時的な分析を与えることを主目的としてきたので、歴史的にどのような変遷を経てきたのかという問題に関する詳細な分析が今後の課題であることは明らかだが、その他にも以下のような未解決の問題がある。

まず、(40)に示す理論的・構成的意味分析および統語構造の問題が挙げられる。

(40) have gotが発話行為的機能を持つとすると、その機能はhave, gotのいずれによるものか。また、その解答が得られたとして、統語構造はどのように分析すべきか。

疑問文ではhaveが文頭に移動し、否定文ではhaveに否定辞notが直接つくことから、少なくとも統語的に法助動詞として分析可能なhaveの方が主張という発話行為を担うとすると、gotは所有を表す動詞であることになると考えるのが構成性の原理からすると妥当であるように思われるが、その分析は正しいのだろうか。むしろ、歴史的にはhave gotが1つにまとまった形で‘have acquired’から「所有」を表すように変化し、完了表現に伴う、命題内容には含まれていない慣習的含意(Conventional Implicature)としての「所有」の意味が命題化したものと捉えるのが妥当かもしれない。そう考えると、have got全体で「所有」の意味を表しながらもhaveは主張という発話行為を担う法助動詞として機能しているということになりそうだが、もしそうだとするとその意味構造は理論的にどのように記述できるのだろうか。

また、もしこのような意味分析を行ったとして、それに対応する統語構造はどう分析すべきであろうか。先行研究では次のような主張がある。

(41) a. have got は get の完了形であり、そこから非完了の意味が特別に読み込まれる。(Jespersen 1931)

b. have は主動詞であり、それが法助動詞の統語位置に上昇し、移動の元位置に意味のない got が挿入される。(LeSourd 1976)

c. got は状態動詞 have と同じ意味範囲を持つ主動詞であり、意味を持たない have が変形の過程で挿入される。(Fodor & Smith 1978)。

これらの知見を参考に、現代の理論で考えるとどのような統語構造が想定できるであろうか。本研究の結果からすると、(41a)にしたがって、getの完了という命題の意味に伴う「所有」という慣習的含意が顕在化するのに伴って have の完了の意味が薄れ、法助動詞 (Fin) 機能のみを持つという意味機能的変化が起こり、さらに、haveが発話行為力を持つことに伴って ForceP 主要部へ上昇するといった分析が考えられるかもしれない。歴史的に考えるとこのような変化が想定されうるが、現代英語においては、gotは(慣習的含意が顕在化したという意味での)所有の意味を表す本動詞であり、haveは ForceP の主要部として基底生成されるとする分析が可能かもしれない。

また、本論では、have got に絞ってその意味機能を考察したが、本論の説明が have got to にもあてはまるのかは、まず次に考察すべき課題であろう。さらに、「口語表現」と一般に言われているものに対しても同様の分析が可能なのがあるか検討していくことにより「口語表現」の語用論的機能に関する類型化、一般化が可能になるかもしれないが、詳細はすべて今後の課題である。

【注】

- 1 have と got の構成的な意味合成や統語構造等も興味深い問題ではあるが、本稿では have got が全体としてどのような意味や機能を持っているかに焦点を当て、構成的な分析については今後の課題としたい。
- 2 Tamura (2005) は「発話時における所有」という言葉を用い、同様の見解を示している。
- 3 登田 (1994) は (14b) と (15) の容認性の違いについて具体的に説明していないが、彼の論に従うと、(14b) で主語となっている女性は現在存命でないか、もしくは存命である場合、現在の眼の色はその時と異なるということになるであろう。
- 4 第5節で富岡 (2010) の言説に若干の文言の修正を加えるが、富岡の意図していることと何ら矛盾するものではないと考える。

* 本論は、第157回日本言語学会 (於：京都大学) における口頭発表の内容を加筆・修正したものである。会場において質問、コメント等をいただいた方々、準備段階で有益な示唆をいただいた神戸松蔭女子学院大学の郡司隆男先生と大学院生の皆様、また、インフォーマントとしてご協力いただいた九州国際大学の Nicholas James Kemp 先生に深く感謝申し上げます。本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「動詞の多義性と文法化の理論的記述・分析—命題の意味, 非命題の意味, 視点的意味—」(2016年度~2019年度, 研究代表者: 日高俊夫, 課題番号 16K02652) の助成を受けている。

【参考文献】

- 荒木一雄・宇賀治正朋 (1984). 『英語史 IIIA (英語学体系第10巻)』大修館書店.
- 田中彰一・村上晉 (1995). 「近代英語における関係詞節の意味と機能」『研究論文集/佐賀大学教育学部』42 (2), 15-29.
- 登田龍彦 (1994). 「Have got に就いて」『近代英語研究』1994 (10), 57-64.
- 富岡諭 (2010). 「発話行為と対照主題」長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて』301-331.
- 中尾俊夫・児馬修 (1990). 『歴史的にさぐる現代の英文法』大修館書店.
- 福地肇 (1985). 『談話の構造』大修館書店.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and form*. Longman.
- Curme, George Oliver (1931). *Syntax: a grammar of the English language*. Heath.
- Fodor, Janet Dean. & Smith, Mary R. (1978). What kind of exception is *have got*?. *Linguistic Inquiry*, 9 (1), 45-66.
- Givón, Talmy (1975). Negation in language: pragmatics, function, ontology. *Working Papers on Language Universals*, 18, 59-116.
- Jespersen, Otto (1931). *A modern English grammar on historical principles: part IV*. George Allen and Unwin.
- LeSourd, Philip (1976). Got insertion. *Linguistic Inquiry*, 7 (3), 509-516.
- Quirk, Randolph, et al. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. Longman.
- Swan, Michael (2016). *Practical English usage: fourth edition*. Oxford University Press.
- Tamura, Toshihiro (2005). On the establishment of the possessive *have got* and its cognitive motivation. *Tsukuba English Studies*, 24, 13-31.
- Visser, Frederick Th. (1973). *An historical syntax of the English language: part III, 2nd half*. Brill.
- 辞書**
- 『ジーニアス英和辞典』(第4版)(2006). 大修館書店.
- 『新英和中辞典』(第5版)(1985). 研究社.
- 『ライトハウス英和辞典』(初版)(1984). 研究社.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary (7th Edition)*. (2005). Oxford University Press.

